

【作文】 中学生の部

「人権と戦争」

大東中学校三年 大久保 成望

僕が今住んでいる日本は平和で、僕たちは自分の思ったことを自由に話し、家族や友達と楽しく暮らしている。でも、昔の日本にはその「当たり前」の自由や権利が全くなかった時期があった。この春の修学旅行で沖縄へ行ったこと、夏休み中に新聞記事で読んだこと、そしてその後に家族と広島を訪れたことを通して、僕の中で戦争や原爆の恐ろしさがひとつの大きな学びとしてつながっていった。

始まりは、この春の修学旅行で訪れた沖縄だった。「アプチラガマ」という暗い洞窟に入り、途中で全員の懐中電灯を消したとき、今まで経験したことがないぐらいの真っ暗闇になり、すごく怖くなった。昔の人はこんな暗くて狭い場所で傷つき、追い詰められて亡くなったのだと知って胸が苦しくなった。また、「平和の礎」に刻まれた膨大な数の名前を見て、一人ひとりにやりたいことや大切な家族があったはずなのに、戦争によって命も日常も奪われてしまったのだと深く実感した。

沖縄から戻り、夏休みを迎えたある日、被爆体験証言者の切明千枝子さんに関する新聞記事を読む機会があった。そこには、驚くような事実と、当時の不自由な世の中の姿が書かれていた。特に心に残ったのは、昔の人が自由に自分の気持ちを言えなかったことだ。作業中に「こんなことをしていて本当に勝てるのかな」とつぶやい

た生徒に対して先生がとても怒ったこと。戦争が始まったとき、千枝子さんのお父さんが「大変なことになった」と言ったら、お母さんが家族に口止めをしたこと。自分の素直な疑問や心配すら口にできないのは、今では考えられない。当時は自分が思っていた以上に、日本全体が戦争に向かっていて、「言論の自由」すらない世の中だったのだと分かった。さらに記事には、原爆から生き残った人の「どうしてあなたは生きているのか」と周りから見られている気がするという言葉や、広島の平和記念公園は遺体を全部拾い上げることができないまま建てられたという事実も書かれていた。

この記事を読んだ後、僕は実際に広島を訪れた。まず向かった平和記念公園で、目の前に広がる静かな景色を見つめながら、僕はハッとした。今僕が立っているこの足の下に、いまもたくさんさんの遺体が眠っているのだと気づいたからだ。人が死んだときにちゃんとお墓に入って眠るという当たり前の尊厳さえ奪った原爆の残酷さが、自分の足元から重く伝わってきた。すぐ近くに立つ原爆ドームの痛々しい姿も、当時の破壊の凄まじさをそのまま物語っていた。その後訪れた平和記念資料館の原爆が落とされる前の広島の写真には、たくさんの方がいて街が栄えていた。しかし、原爆が落とされた後の写真は、ただのがれきの山だった。本当に同じ場所なのかと、ショックを受けた。また、展示されていた錆びた三輪車は、ただの壊れたおもちゃには見えなかった。これに乗って遊んでいた子供の命が突然奪われたのだと思うと、何とも言えない重い気持ちになった。被爆した人が着ていたボロボロの服や、そこに書かれた言葉を見てい

ると、写真の人たちが「苦しい」「助けて」と直接話しかけているように感じた。八十年前の当時、そこにあった本物の服や物があるからこそ、その言葉の重みがすごく伝わってきた。

沖縄のガマで感じた暗闇の恐怖、夏休みの新聞で知った言論の弾圧や被爆者の苦しみ、そして広島の平和記念公園の足元に眠る無念さと資料館で見た展示。体験が重なる中で、僕は戦争が人の命や自由、そして人間としての権利のすべてを奪ってしまうものなのだと強く学んだ。昔の人が経験した苦しみや心の叫びを、僕たちは絶対に忘れてはいけないと思う。過去のことだからと他人事にせず、命や人権が大切にされる平和な世の中を、僕たちの手でこれからも守っていききたい。

【作文】 中学生の部

「違い」

氏名非公表

人の容姿を否定する行為は、SNSが世界に広がってから、以前よりも増えたように感じる。SNSに何かを投稿する以上は叩かれるのは当たり前だ、という考え方があることは理解できる。しかし、私はそれが当たり前になってしまっていることが問題だと感じている。「違い」に敏感な世の中で、人と少し違うところを見つけては群がり、面白がって一斉に叩き始めることがあるが、それが当たり前になるということがあってはならないのだ。容姿について、人に何か言われることは思っているよりも辛いから。

私は昔、友達に「ホクロ、めっちゃ多いよね。」と、笑いながら言われたことがある。その頃の私自身は、自分のホクロを嫌っていたわけではなかった。むしろ、母から受け継いだホクロを、自分では気に入っていたのだ。だから、その時は困惑した。笑いながら言われたその言葉に、深く傷ついたことを覚えている。その日から、私は顔にたくさんあるホクロを意識するようになった。そしてある日、友達と自分のコンプレックスを言い合うことになった時、私は自分がホクロを気にしていることを知られるのが怖かったため、ホクロとは関係ないことをコンプレックスだと言った。すると、友達から「顔のホクロじゃないんだね。」と言われた。その言葉を聞いた時、私はやっぱり周りの人はこのホクロをよく思っていないのだと思い、さら

に気にするようになった。それらの出来事がきっかけで、私は自分の顔に苦手意識を持つようになった。写真に写るときや、初対面の人の前では、相手が自分の顔をどう思っているのかばかりを気にするようになってしまった。けれども、このホクロは母からの遺伝だから、ホクロでいじられた時の悲しさを母にも言えなかった。母から受け継いだものに「嫌だった」と言えば、母まで悲しませてしまうから。ホクロがなければもっと自分を愛せただろうし、写真にももっと笑顔で写れただろう、と思うことも多々ある。だから、容姿を否定する行為は危険なのだ。言葉一つで相手の人生を大きく変えてしまうかもしれないのだから。

正直、このように自分のコンプレックスを晒すことは、とても怖いし、勇気が必要だ。でも、私の体験談が、自分のコンプレックスで悩み続けている誰かの役に立ち、少しでも勇気を与えることができたら、と思う。また、逆に人の容姿について少しでもいいことのある人が、その事の重大さに早く気づいてくれたら、と願っている。

世界はコンプレックスを抱えた人で溢れていて、中には「コンプレックス」を「整形」という方法で自分の好きなものに変える人も多い。それをSNSで発信することに批判的な声を目にすることも多い。けれど、私はその整形に関する動画を見て、コンプレックスを自信に変えられる方法があると知った。だから、そのような動画は、コンプレックスで悩んでいる人たちにとって支えであり、大きな勇気を与えてくれるものだと思う。批判するのは簡単だが、投稿者が抱

えてきた気持ちや投稿した理由についても目を向けられる人が増えてほしいと思う。

また、「デブに人権はない。」「可愛ければ許される。」等、差別的な言葉をよく耳にするが、可愛さの基準は人によって違うし、人権は誰かの価値観でなくなるものではない。いじられた本人が笑っていたとしても、喜んでいるかはわからない。それどころか、自分では何とも思っていないかったり、むしろ好きだと感じていたりしたことが「コンプレックス」として形を変えることがあるのだ。

このように、自分たちの言葉には何かを大きく変える力があるのだということを、誰しも忘れないでほしい。自分のひと言が、知らず知らずのうちに誰かの個性を潰してしまうかもしれないということに自覚して生きてほしい。私は将来、もしかしたらお金を貯めてホクロをとるかもしれない。でも、それは決して悪いことではないと自信を持って言える。自分を愛するために最善を尽くすだけだから。ただ、今はこのコンプレックスを愛してあげて忘れないでいたい。周りの言葉に傷つくこともあるけれど、自分が今の自分を愛せることはとても大切なことだから。「違い」が受け入れられ、一人の個性や人権を大切にされる世界が広がることを願っている。

【作文】 中学生の部

「差別や偏見のない社会を」

米原中学校一年 角田 海

僕の父はアメリカ人です。そして母は日本人です。僕は父の仕事の都合で、生後一か月から六歳まで香港で過ごしました。香港では、二歳から小学一年生まで、インターナショナルスクールに通いました。小学一年生の二期に米原小学校に転校して、そこで初めて日本の学校に通い始めました。

転校した直後、周りの人たちから、「ハロー」と笑いながらからかわれるように話しかけられることがありました。香港ではいろんな人種の人や、国籍の人が住んでいて、今までこのような経験をしたことがなかったので、人生で初めての経験でした。少し悲しくなりました。周りの人たちは、僕が日本語を話せることを知っているのに、父がアメリカ人だから外国人あつかいしているのかなと思いました。

それから僕は、日本で外国人や外国の血が入っている人に会っても、からかって話しかけたりしないこと、また特別あつかいをしないようにしようと自分の中で決めました。自分にされたくないことは、人にはしないでおうと思いました。

また僕は小学三年生の時に、国語の授業で、「ちいちゃんのかげおくり」という話を習いました。太平洋戦争の悲惨さを伝える話として有名な作品です。その話を習っているときに、「アメリカ最悪、死

ねよ」と言うクラスメートの子が何人かいました。ぼくはそのことを聞いて、自分の悪口を言われている気分になり悲しくなりました。自分の血の中に入っているアメリカと日本という国が戦争をしていたという過去があり、とても複雑な気持ちになりました。その時、クラスメートたちと授業を受けるのがいやになり、教室にいたくなかったです。

それ以来、国語や社会の歴史の授業で、太平洋戦争のことを習う時、またアメリカの悪口を言われるのではないかと心配になりました。でもそのたびに、担任の先生たちが、「どの国のことも悪く言うべきではないよ。」と言ってくださり、心がとても楽になり救われた気持ちになりました。

最近の日本は国際化していて、外国人や外国の血が入っている人たちの割合が増えてきていますが、僕の住んでいる地域ではあまり多くいません。誰に対しても、外見や名前を理由に特別扱いするべきでないと思います。悪気がなくても、本人たちは深く傷ついていることがあることを知ってもらいたいです。差別や偏見がない社会を目指していきたいです。